COMPANY HISTORY

世界が変わる
空調服

照井康介

目次

序章　未来を変える企業との出会い……5
1章　奇人・市ヶ谷弘司……12
2章　技術系ベンチャーの立ち上げ……26
3章　訪れる転機の予感……40
4章　チャレンジの方法とその判断……55
5章　知恵と頑固さ、そして少しの運……68
6章　時代の流れの中で、それぞれができること……82
7章　空調服のつくり方――それぞれの再出発……105

8章　積み重ねてきたもの……122
9章　感情と理屈の狭間で……140
10章　タンブリング・ダイス……157
11章　パンドラの箱の底……172
12章　逆境がもたらす成長……190
13章　新たな世界へ……207
終章　空調服のDNA……227
あとがき……234
参考資料・文献……238

序章　未来を変える企業との出会い

平成最後の夏と言われた２０１８年の夏は暑く、長かった。平均気温、最高気温、日照時間など、各地で観測史上の最高記録を更新した。私が暮らしている東日本では平均気温が平年比で2・8度ほど高かったらしい。日中気温が40度を超えたというニュースが何度あったかは覚えていないが、「また40度超えか」と頻繁に思ったことは記憶している。

梅雨明けも例年より早かった。東日本では6月の終わりには梅雨明け宣言が発表され、「今年は本当に梅雨があったのか」と感じたほどだ。そして、それから長くて暑い日々が秋の彼岸を過ぎても続いた。

西日本はただ暑いだけではなく、集中豪雨による痛ましい被害が出た。２０１６年の熊本地震と豪雨災害、２０１７年の北九州豪雨に続く災害であり、6月末から7月初頭にかけて降り続いた記録的豪雨によって西日本広域で被害は拡大した。

最終的な被害は消防の発表によると、死者２２４名、行方不明者8名、負傷者４５９名（重

傷１１３名、軽傷３４３名、程度不明３名）もの犠牲者を出したという。建物被害も住家全壊６７５８棟、半壊１万０８７８棟、一部破損３９１７棟、床上浸水８５６７棟、床下浸水２万１９１３棟という最悪の事態になってしまった。

さらに台風による関西国際空港の浸水被害や、北海道地震によるブラックアウトなど災害が続いた夏でもあった。

西日本での豪雨被害のニュースを聞いたとき、すぐに福岡在住の友人に連絡をとった。その友人は熊本県菊池が地元で一昨年は実家の一部が土砂で流される直接的な被害を被っており、昨年も北九州での被災地の復興支援活動に関わっていたので、もしかして巻き込まれているのではと何も考えず反射的に連絡したのだ。

スマホからメッセージを送ると、すぐに折り返し連絡があったので少しだけ安心して、通話ボタンを押すといつもと変わらない声が聞こえてきた。

「幸いウチの辺りは大丈夫だったけど、去年被害があったところはわかんないね。地盤とかも緩くなっているだろうし」

落ち着いたらまた足を運んでみるという友人に対して、何もできない後ろめたさを少し感じながら、「来ても迷惑になるだけかも。普通に募金するとか近場でお金使ってくれるほうが喜ばれるよ」と昨年友人に言われた言葉に従って、夏休みにまた遊びにいくことと、

友人が最近ハマっているという無糖紅茶のペットボトルを個人的な激励を込めて送ることを告げて通話を終了した。

後日、近所のスーパーで買ってきた割安のペットボトルのケースと、昨年おみやげに持っていったら「子どもたちが喜んだ」と好評だったもんじゃ焼きセットを箱詰めした。加えて、今年はもう一つ手元にあったものを同梱した。

昨年の夏は知らなかった。いや正しくは、なんとなくそういうアイテムがあるということは知っていたのだが、その存在をはっきり意識させられたのは今年になってからだったものだ。その、とあるアイテムが『空調服』だ。

私が空調服というものを意識させられ、そして意識するようなったのは２０１７年の暮れのことだった。駆け出しの頃からお世話になっている先輩編集者から久しぶりに連絡があり、取材記事を依頼されたのである。

「空調服って知っている？　それを発明した人なんだけど、凄い面白い人でさ、とにかく発想が俺たち常人と違うっていうか、話もなんかぶっ飛んでるんだよね。いや怖い人とかじゃ全然ないよ。人当たりのいい優しい人なんだけど」

久々に会った先輩は近況報告も早々に切り上げると、昔と変わらない高めのテンション

でそう告げた。

空調服というワードを聞いただけではピンとこなかったが、「あのファンが付いた服だよ」といわれると、「ああ、ありますね」と、ようやく脳内で像が一致した。

先輩の話によると東京オリンピックをはじめ全国的な建築需要の高まりもあって、その空調服が近年かなり売れていて夏場は欠かせないアイテムになっているらしいこと。また、空調服のエネルギー効率は素晴らしいらしく省エネにもつながるとのことだった。事実、この打ち合わせの数日前に地球温暖化対策に役立つ発明ということで環境大臣から表彰もされているという。

ただ、その発明者の発想がそんなに凄いのかはいささか疑問に思った。「たしかに服にファンを取り付けようなんて誰も思わないだろうけど、それだけでそんな大げさな」というような感想を持ったのである。

しかし年明け早々にその発明者に会い、その突飛な発想、着想の一端に触れ、製品化に向けた努力と苦難の数々を知り、試着用の空調服を一着もらい実際に試してみたあとでは、その感想は全く違ったものになった。簡単にいうと、「それだけ」だとか「大げさ」だとか思ったことについて、恥ずかしくて恐縮するよりほかなくなったというわけだ。もちろんそれだけでなく、同時に空調服という稀有な発明品というか製品と、その製品に秘められた可

能性に強い興味を持つことになった。まさに意識するようになったのだ。

意識するようになると、今まで見えていなかったものが見えてくる。

最初に気づいたのは、それから5、6カ月ほど過ぎた頃、その年の初夏の頃だったろうか。昼間の山手線に乗っていると作業服を着た男性が2人乗り込んできたことがあった。そして、その作業着の背中には見たことがある2つのファンが取り付けられていたのである。可動していたわけではなかったので、一見すると普通の作業服にしか見えなかったが確かにそれは空調服だった。もちろん普及が進んで目にする機会が増えただけとも考えられるのだが、もしかすると今までにも見たことがあったが気が付かなかったのかもしれない。

そんな風に思うことが他にもあった。次はSNSのタイムラインでのことで、ビニールハウスでの農作業を紹介するような内容だったと記憶している。今までならば読み飛ばすような内容だったが、「あれ、この作業着についたファンは……」と写真をよく見ると、これも空調服だった。投稿をよく読むと、「空調服無しでの作業は考えられない」というようなコメントまでされていた。

もしかすると、空調服というのは考えているよりも普及しているのではないか。そんな思いがより深まったのが、デザイナーの友人と飲み屋にいたときのことだった。仕事の話

をきっかけに「少し前に空調服を発明した人を取材して、色々と驚かされた」というような話をしたのだが、彼はすでに空調服を知っているばかりでなく、愛用していた。彼は海釣りをやるのだが、家族や釣り仲間で船を出すときには全員が着ているという。日焼けしないので女性陣にも好評で、とにかく夏場は欠かせないと話していた。

これだけ活躍を目にしたり耳にしたりすると、ただこれまで私が知らなかっただけだったという思いは一層増すことになった。そして空調服は仕事現場の快適な作業着としてだけでなく、レジャーなどでも活用される夏場の必需品になりつつあるのだと感じた。

連日の猛暑日が続く7月の終わり頃、福岡の友人から連絡があった。

「差し入れ色々ありがとうね。あと一緒に入ってたあの服、凄い良かったよ。めちゃめちゃ涼しくて、なんていうか着ると世界が変わるね」

休日に支援活動に従事している友人にそんな風にいってもらえると、少しは役に立てたかなと嬉しくなった。そして、なぜか少しだけ誇らしくもあった。自分の手柄でもなんでもないのだが、友人の世界観が変わるような何かを紹介できたことに充足感を覚えたのだ。

その翌日、私は手紙を書いた。試供用として頂いたものを勝手ながら友人に送ったお詫びと事情の説明、そして友人が大変喜んでくれたことと、そのお礼を伝える内容であった。

宛名は市ヶ谷弘司氏、株式会社セフト研究所の社長であり、株式会社空調服の会長でもある。その年のはじめに取材した、空調服の発明者その人だった。